



VOL. 129

平成25年2月15日発行

宮城県大崎農業改良普及センター

〒989-6117 大崎市古川旭四丁目1番地1号

TEL (0229) 91-0727 (地域農業班)

91-0726 (先進技術班)

FAX (0229) 23-0910

HP <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/nh-sgsin-n/osakihukyu.html>

E-mail osnokai@pref.miyagi.jp

ホームページのURLが新しくなりました!

おおさき ~大きい輪、和、話~ Osaki



なす天敵防除現地検討会



水稲採種ほ場審査



加工トマト現地検討会

大震災の後に変わったこと変わらないこと

あの日から一年十一ヶ月が過ぎ、まもなく二年という時間が流れます。

マグニチュード九の地殻変動が起き、地震学者は「日本列島は、震災を受けて我々の知らない日本列島となった」と言っているようです。大震災で変わったのは地殻のみでしょうか。気象も変わったのではないかと感じます。

事実、大震災以後は大風、大雪、大雨、寒波、真夏日の連続記録等々異常気象が多く、それが大崎地域の農業に大きく影響してきています。

しかし、大崎、加美地域は自然が豊かであり、その自然を活かした人々の営みは、大震災後も変わることはありません。

古来、農業は自然との闘いでありましたが、気象のぶれを想定し、より生産が上がるように支援するのは農業技術者の努めであると考えます。

震災後、大崎地域に着任し「大崎、加美地域に何が必要か」を職員とともに議論してきました。

「議論し方向を定めて提案し、関係する方々とともに課題を解決する」というような姿勢は、大崎農業改良普及センターでは変わらず続くものと考えます。来年度も、職員が新たな提案などを行うことがあると考えますので、今まで以上のご指導、ご助言をお願いいたします。

大崎農業改良普及センター所長 及川 悟

プロジェクト課題の活動紹介

幸せな農村生活を送るために ～(農)KAMI～

加美町中新田地区の集落営農組織「下新田上集落営農組合」(農業者戸数七十九戸・農地面積百二十畝)は、水稲に加え大豆・飼料用米・はくさい等の多彩な転作物生産や、小学校の体験交流受け入れ等を集落ぐるみで行っています。これまでの活動を通して、集落営農組織が将来に向けて継続されるために、また、事業導入による経営的メリットも考え合わせ、法人化に向けての話し合いが必ずやのことから、支援を行いました。

◎**営農組合の法人化に向けた運営支援**

平成二十三年度から集落全体の組合員を対象に「法人化に向けての勉強会」と題して本格的に法人設立への準備を開始しました。

「県担い手協議会・加美町担い手支援センター・加美町再生協議会・JA加美よつば・JA経理センター」に働きかけ、常に情報を共有し法人化に向けての支援チームを設置しました。

支援チーム員と集落営農組織の組合長が中心になり、組合員に法人とはなにか、法人になるとどのように変わるのか、規模拡大による経営シミュレーションの提示、農地集積のメリット・税法上の考え方等について、質疑応答を加えながら合計五回の勉強会を実施しました。

勉強会の中間には、組合員を対象に二度のアンケートを実施し、勉強会の理解度や参加意向などを確認しながら、法人化に向けての支援を行いました。その結果四月に農事組合法人KAMIが設立され、同時に「人・農地プラン」が作成されました。

◎**新技術(加工トマト)の品種比較・省力技術導入) 定着化支援**



新規作物の試作に取り組みに当たって、「若苗のホールプラント方式」「省力化を目的にした品種比較・選定」の省力技術導入を働きかけ、収量調査結果の検討と経営分析を行い、栽培の定着を図りました。

特産えごまによる地域振興 ～えごまは地域の宝～

色麻町では平成十二年度から「えごま」を地域特例作物に位置づけ、助成事業等を行い、色麻町えごま栽培推進協議会が中心となって講習会や現地検討会等で栽培管理技術の向上を図ってきました。平成二十二年度はベニフキノメイガ等がえごまの茎葉や花穂を食害し、減収したことから、生産者の作付意欲低下を防ぐ対策が必要となりました。また、協議会として消費拡大を図るため交流事業へ取り組み機運が高まりました。



た。さらに、えごまとともに健康作物として栽培している「にんにく」の安定生産も求められています。このため平成二十三～二十四年に普及センターで支援しました。

◎**えごま収量品質の安定に**

向けた検討

平成二十三年度は生物農薬での農薬登録拡大試験を実施し、本年度も関係機関と生育調査ほを設置しました。メイガ類の寄生状況を把握し、登録拡大された生物農薬二剤の情報提供を行いました。

◎**新たな特産品目(にんにく)の栽培技術向上支援**

関係機関と連携し、にんにくの生育調査ほを設置し、現地検討会等でほ場の排水対策、生育状況に応じた肥培管理と病害の防除対策を指導しました。

◎**協議会活動の支援と地域食材活用に向けた検討**

交流事業に取り組みにあたって、地域の食材や加工品の良さを交流相手(消費者)に伝える手法を学ぶ指導会を開催しました。商品開発コーデイナータ五日市知香氏を講師に、色麻町産業開発公社が商品化したえごまやにんにく加工品の活用方法と提携メニューについて検討しました。

「素朴な味」「地元で当たり前に食べる郷土食・伝統食」こそ「色麻らしさ」消費者が求めるものであり、町内の豊かな食材ひとつひとつが「宝」であることを改めて気づかされる有意義な場となりました。

天敵農薬とGAP導入による なす産地の体制強化

平成二十三〜二十四年度に、古川地域のなす産地の体制強化に向けて、天敵農薬とGAP（農業生産工程管理）導入に向けた支援を行いました。

天敵農薬は、スワルスキーカブリダニ（アザミウマ類・コナジラミ類に有効）とミヤコカブリダニ（ハダニ類に有効）を用いました。これらの放飼方法を検討し、放飼実演会や現地検討会などを開催しました。

また、GAPの導入を推進するために、講師を招いて研修会を開催しました。

◎天敵農薬の利用方法

古川地域で一般的な三月に定植する作型にあわせ、五月の天敵放飼を検討しました。天敵を放飼した後、定着するまでの約二週間は整枝作業が行えないため、田植えなど他の作業に専念できることがメリットです。

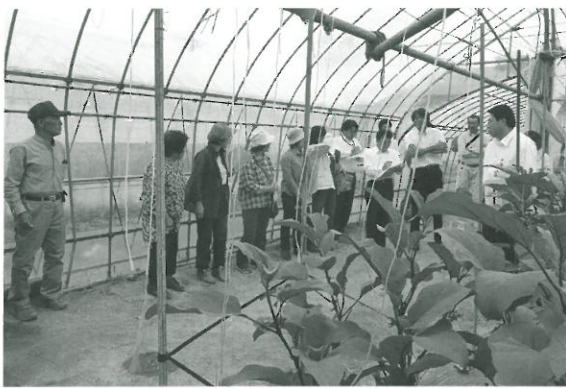
天敵は害虫防除に効果が高く、導入により農薬散布回数が平均で九回から七回と減少しました。ただし、天敵だけでは害虫の急増を抑えることができないため、害虫の発生がみられたら、天敵に影響のない化学農

薬を早めに散布して害虫を抑えることが大切であることもわかりました。農薬散布回数は減少しましたが、

天敵農薬代は化学農薬代と比較して高価なため、天敵農薬代を加えた農薬費は一・八倍になりました。このため、労力と費用を考慮して経営に加えることが重要です。

◎GAP導入の推進

研修会では、JGAP指導員基礎研修の講師を務める（株）穂海の社長丸田洋氏に、講演と生産者のハウスマ調製加工場で直接指導をしていただきました。指摘された点をさらに取り組みやすいように改善していきたいと考えています。



GAP 推進研修会

安全安心農産物による 農業再生プロジェクト

当センターでは本年度、別表の通り農林産物を中心に、放射性セシウムの精密検査（ゲルマニウム半導体方式 県産業技術総合センター及び民間委託）六百三十五点と簡易検査（NaIシンチレーション方式 北部地方振興事務所）千七百五十五点を実施しています。米・麦や大豆は一部で低濃度の放射性セシウムが検出されたものの基準値を超えるものはありませんでした。

ソバの一点で基準値の百ベクレルを越えたため、一部で出荷自粛となりました。また、林産物では原木しいたけ（露地）や山菜の一部も基準値を越えており出荷制限となっています。

野菜等の園芸品目は、ほとんどで放射性セシウムが不検出となっており安全性が確認されています。市町等の関係機関にも簡易検査機器が導入されており、今後も役割分担を図りながら、モニタリング体制の強化を目指して行きます。

また、シンチレーションサーベイメーターによる管内各地の空間放射線量の調査や、昨年に引き続き土壌

の放射性セシウム濃度の定点調査を実施し、汚染状況の現状把握にも努めています。

今後とも安全安心な農産物の生産に向けて、多方面で積極的な放射能対策を進めていきます。

平成24年度 放射性セシウム調査点数
(12月末現在)

| | 精密検査 | 簡易検査 |
|-----------------|------|------|
| 農産物 | | |
| 麦 | 4 | - |
| 米 | 270 | - |
| 大豆 | 198 | - |
| ソバ | 29 | - |
| 野菜 | 34 | 321 |
| 果樹 | 4 | 25 |
| 林産物 | 42 | 103 |
| 非食品 (土壌、飼料等) | 54 | 1306 |
| 合計 | 635 | 1755 |



農家対象の放射能に関する講習会

福島第一原発事故

関連情報

飼料作物の実証成績について

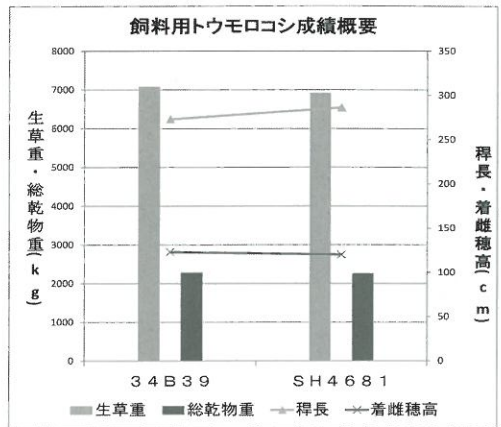
一昨年三月の福島第一原発事故に起因する放射性セシウムの飛散により、管内でも永年生牧草等も利用自粛となるなど畜産経営に大きな影響を及ぼしています。その対策の一つとして草種転換があります。普及センターでは、今年度牧草から飼料用トウモロコシやスーダンへの草種を転換した実証ほを設置し、その栽培支援を行いました。

飼料用トウモロコシ(加美町米泉)

品種比較調査とともに放射性セシウム濃度についても調査しました。品種は、34B39、SH4681の二品種で、成績概要は下図のとおりです。放射性セシウム濃度は、作付け前の土壌中(十五cm深)では、二百九十三Bq/kg(乾土)でしたが作物中では二品種とも下限値(八・二Bq/kg)以下となり、移行係数は六%以下でした。

スーダングラス(加美町長清水)

スーダングラス(品種名ヘイスーダン)についても土壌中や作物中の



スーダングラス (1 番草)

放射性セシウム濃度等を測定しました。放射性セシウム濃度は、作付け前の土壌中では、十五cm深で四百三十Bq/kg(乾土)でしたが、一番草で四十二Bq/kg(水分八十%換算)、二番草で二十一Bq/kg(同)となりました。

大豆に放射性セシウムを吸収させない対策の徹底を

平成二十四年度産大豆においては放射性セシウム吸収抑制対策の徹底が図られた結果、管内で生産された大豆は全て基準値(百Bq/kg)以下でした。

実需者や消費者からは、平成二十五年産大豆においても安全な食品が求められており、引き続き放射性セシウムの吸収抑制対策をしっかりと行う必要があります。

①二十cm以上を目標に深耕

ほ場内の放射性セシウムの偏りが生じないように良く攪拌しましょう。

②基肥に加里肥料を増肥

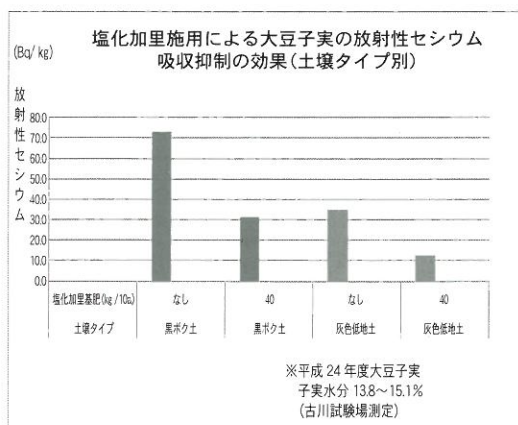
塩化加里を一・五袋/十ア施用する等土壌中の加里濃度を高めましょう。特に、粘土質の少ない土壌で効果的です。

③基肥に苦土石灰を五・十袋/十ア施用

酸性土壌ではセシウムが植物に吸収されやすくなる傾向があります。大豆の適正土壌酸度(pH)である六・六・五に矯正するため、石灰質肥料を施用しましょう。

④耕起前に完熟堆肥を一ト/十ア施用

砂質土、山土などCEC(陽イオン交換容量)が低い土壌ではセシウムを留めておけず、植物に吸収されやすくなる傾向があります。堆肥は完熟のものを利用します。未熟堆肥は、タネバエや雑草の発生を助長するので避けてください。



⑤収穫時のコンバインの刈高は十cm

適切な刈高で土壌混入による汚損粒を防止しましょう。



II 地域情報 II

小学生の農業体験学習への支援

宮城県子ども農業体験学習推進事業を活用し、大崎市立富永小学校五年生三十六名の農業体験を支援しました。



六月中旬に校内の畑に大豆（ミヤギシロメ）を播種し、七月中旬に中耕・培土を行いました。途中、当番を決めて水やりや雑草の抜き取りを行いました。

一月には、生活研究グループの方を講師に、子ども達が栽培した大豆を使って豆腐加工とおからのお菓子づくりを行いました。児童の中には家が農家という子どももいましたが、農作業を手伝った経験がある子どもは少なく、今回の体験で農業の大切



さ、食べ物の大切さを体で実感することができ、新鮮で興味深いものになったようです。子どもたちの生き生きとした顔がとても印象的でした。

異業種交流で経営力アップ 青年農業者経営研修会

一月二十八日（月）ウラバタケCafe（大崎市古川穂波）で、青年農業者経営研修会が開催されました。

今回の研修は、講師が『事業経営で一番大切にしてきたこと』を話題提供し、参加者全員で議論を深めていき、①他流試合を通じた視野の拡大、②触発による学習・向上意欲の鼓舞、③異業種交流による知的人脈の形成を図りました。

六名の講師は、中小企業診断士、NPO法人、建築業、デザインサービス、生命保険業、飲食業といった多彩な分野に属しています。



今回の研修を異業種交流としたのは、普段、触れることのない異分野の講師と交わることによって、価値創造や革新的な発想をひきだし、問題解決の糸口を見つげるためです。また、研修の効果を高めるため、名刺交換会のような形だけの挨拶形式ではなく、課題を設定し、真剣な議論を重ねることによって価値観や考え方に新たな影響が与えられることを狙いとしました。交流した農業青年十一名は、「新たな視点を今後の自分の経営に活かしていきたい」と、大きな収穫を得ていました。

3K農業で 大崎地域を元気に

二月五日（火）アインパルラ浦島（大崎市古川）で、大崎地域認定農業者連絡協議会（以下「認定協」）恒例の研修交流会が開催されました。今年、「かっこよくて、感動があつて、稼げる3K農業で、大崎地域を元気にしよう」をテーマに基調講演と事例発表が行われました。

基調講演には農家のこせがれが農業を継ぐのが夢と言えるような農業を目指し活動するNPO法人農家のこせがれネットワーク（東京）代表

の宮治勇輔氏（三十四歳）から、若い世代の活動事例を通し、既存の仕組みにとらわれない自由な発想で農業を盛り上げ、地域を元気にしているってほしいと激励をいただきました。

事例発表では、白石市の（有）竹鶏ファームの志村竜生氏から、民間企業への就職後、実家の養鶏場に就農した経験と宮城のこせがれネットワークの活動など、身近な後継の事例をお話いただきました。



交流会では毎年各市町認定協から地元自慢の地場産品を持ち寄り、試食や抽選会をしています。今年は昨年十月に新発売された、JA加美よつば産の米粉、色麻町産のえごまと卵を使用し地元食材にこだわったケーキ「愛のロール」もお目見えし、地元の味を楽しみました。この研修交流会が、認定協会員の十年後の明るい将来像を描く一助となることを願います。

「お知らせ」

農業・農村活性化女性グループ等表彰
花袋・天王加藤重子さん



村の活性化を実践している個人を表彰する女性表彰事業の起業部門において、「花袋・天王の加藤重子さん」が表彰されました。

加藤さんは、平成元年に旧小野田西地区の女性農業者を核とした「白梅会」を設立、「やくらいおふくろ便」を開始しました。また、旧小野田町が目指す「自然とのふれあい小野田の推進」の担い手となりグリーンツーリズムに取り組み、現在もその活動は継続されています。平成十三年には地場産品を活用した農家民宿「花袋・天王」を県内他の地域に先駆けて開業しました。その活動が評価され、今回の受賞になりました。

働きがいがあり、農村らしいゆとりある生活ができる条件の整備や男女共同参画推進に積極的に取り組む等、農業・農

宮城県農林産物品評会受賞者

| 部門・作物 | 賞 | 生産者 |
|----------------|--------------------|----------------------------|
| 普通作物・水稲(うるち玄米) | 知事賞3等 | 鎌田 義喜氏(加美町) |
| 野菜・だいこん | 知事賞1等 (園芸協会会長賞) | 高橋 宏幸氏(大崎市) |
| 野菜・きゃべつ | 知事賞3等 | 伝八野菜部会(色麻町) (代表 渋谷度太八氏) |
| 野菜・なす | 知事賞3等 | 佐藤 庄志氏(大崎市) |
| 野菜・パプリカ | 知事賞3等 | 早坂 孝幸氏(加美町) |

宮城県花き品評会受賞者

| 品目・品種 | 賞 | 生産者 |
|---------|-----------------|-------------|
| ピオラ・ソルベ | 金賞6席 (仙台市長賞) | 伊藤美知子氏(加美町) |

宮城県農林産物品評会・花き品評会

平成二十四年十月十三日、十四日のみやぎまるごとフェスティバルの会場にて品評会が開催されました。県内各地から多数の出品が行われた中、次の方々が入賞されました。今後の更なる発展をご期待申し上げます。

水稲種子の浸種・催芽は慎重に!

平成二十五年播種用の水稲種子は平成二十四年の登熟期間が高温だったため、休眠が深くなっています。発芽を揃えるため、管理に気をつけましょう。

●浸種水温は、水温十度前後で!
水温が低いと(五度以下)再度休眠し、水温が高いと(十五度以上)ばか苗病等の病害の感染を助長します。

●浸種中の給水ムラをなくす
催芽がばらつかないよう、二日から三日毎に水交換、布袋の位置の入れ替え、袋を揺する等しましょう。

●播種作業を早めない
休眠が覚める時間の確保と浸種水温十度を保つため、田植え予定日の三十二日から三十七日前の(四月八日から二十日頃)に播種を行います。

●催芽温度は適切に
催芽温度は、ばか苗病発生が少ない二十八度から三十度で行い、確実にハト胸状態にしましょう。

●播種量を調整する
催芽時間を長くしても芽揃いが不十分な場合は、播種量を五から十パーセント程度多くしましょう。

水稲除草剤の使用
— 止水管理7日間を遵守 —

水田で除草剤を使用する場合、河川や湖沼への流出による悪影響を防ぐため、止水期間の遵守が使用者に求められています。

水稲移植前使用除草剤の使用時期(平成24年8月変更)

| 変更前 | 変更後 |
|-------------|-------------|
| 植代時～移植4日前まで | 植代時～移植7日前まで |
| 植代後～移植4日前まで | 植代後～移植7日前まで |



効果の安定・環境への影響軽減のために、移植前の散布でも、必ず7日間止水しましょう。